カルロ・ギンズブルグ、カルロ・ポーニ「名前とゲーム――不均衡な交換と歴史学の市場」

Carlo Ginzburg and Carlo Poni, "The name and the game: Unequal exchange and the historiographic marketplace", in Edward Muir and Guido Ruggiero (eds.), *Microhistory and the Lost Peoples of Europe*, The Johns Hopkins University Press, 1991, pp. 1-10. ("Il nome e il come: scambio ineguale e mercato storiografico", *Quaderni storici*, 40, 1979, pp. 181-90.)

紹介

ミクロストリア研究のマニフェストとして受け取られてきた重要な論文。著者は、1970年代のフランス・イタリア間の歴史学の差異から出発し、フランスの数量的手法に対するイタリアのミクロストリアの独自な立場を表明している。

〇イタリア・フランス間の歴史学における不均衡¹(pp. 1-2)

- ・過去半世紀にわたって〔1979 年時点から〕、イタリア・フランス間の歴史学には不均衡があった。ところが、新たな研究動向の出現とともに、まったく新しい段階に入ったという確信がある。
- →以下では、この新しい動向について見ていくことになる。
- ・イタリアにはきわめて豊富な文書史料があるにもかかわらず、イタリアの歴史学は従属的な立場にあった。豊富な一次史料とそれらを掘り崩す可能性との間にギャップが生じてきたのは、数量史(quantitative history)²が世界的な勝利をおさめた時期であった。

〇数量史の長所と短所 (pp. 2-3)

- ・量的研究は、ある程度大きな規模でなされると、大きな金銭的投資と研究チームを必要とする。フランスやアメリカの資本とコンピュータによって可能となる試みは、個人にとっては不可能だろう。
- →本論文が注目するのは、異なる二つのタイプの研究間の規模の違いであって、研究結果を比較分析することではない。

^{1 ○}で表記した小見出しはレポート作者が付した。

^{2 「}数量的歴史学」とも訳される。統計的手法を駆使した歴史研究のアプローチ。

- ・長期間を対象とする量的研究の焦点は物価から生産の変化に移行してきた。時系列史 (serial history)³によって与えられた強力な研究方法は価値ある成果を生み出している。
- ・しかし、長期間を対象とする量的研究は、事実をぼやけたものにしてゆがめてしまうこともあり得る。物価、食料、死亡率が、短期間を対象とする研究において重要性をもつのは、政治権力が価格統制や備蓄の増加、徴用、外国市場での穀物の購買のような手段によって、経済変動や食糧危機に対応する仕方を分析するときである。
- ➡長期間に注目する場合、日々の生存の諸問題(day-to-day problems of survival)を理解する ことは困難となり、生きられた経験(lived experience)は周縁部に追いやられてしまう。
- ・今日では、時系列的数量史(serial quantitative history)はトマス・クーンが言う意味での「通常科学」の一部であると信じられている。そして、イタリアの文書館に保存されている膨大な量の史料を調査するのは、時系列的手法のパラダイムとルールを検証するためでなければならないと信じられているのである。

○マクロへの疑念と人類学の影響 (pp. 3-4)

- ・しかしながら、異なるタイプの研究も登場してきた〔1970 年代〕。きわめて狭い範囲で、 非常に限られた現象の分析を特徴とする歴史研究である(例えば、 村の共同体、一族 集団、個人が対象となる)。
- ・この傾向は、歴史学にとっての①外的理由と②内的理由の両方によって説明することができる。
 - ①外的理由:マクロの歴史学に対する疑念

東南アジアにおける戦争やセベソ事故 [1976 年]、アモコ・カディスの座礁事故 [1978年] のようなさまざまな現象が、久しく分析されずにいた戦略目標(社会主義や限りなき技術発展)についての議論を復活させることになった。ミクロストリアの興隆は、マクロの歴史学の既成の手続きに対する疑問が大きくなってきたことに結びついている。

②内的理由:歴史学と人類学の結びつき いままで見過ごされてきたテーマが人類学によってもたらされた(例えば、親族関係、 物質文化、象徴儀礼、魔術)。

⇒さらに、人類学は概念的な参照枠組み(conceptual frame of reference)を提供。自民族中

³ 「系の歴史学」とも訳される。同質かつ時系列に基づくデータ(たとえば、物価や人口など)の分析を駆使する歴史研究のアプローチ。

先端課題研究 19 文献レビュー(歴史学) 一橋大学大学院言語社会研究科博士後期課程 鈴木 良和

心主義の幻想が解体することで、普遍史の理想が維持できなくなった。歴史を吸収した人類学、あるいは人類学を吸収した歴史学だけが、人類の数千年にわたる持続を再考するのにふさわしい。

〇歴史学と人類学:社会関係の複雑さへのまなざし (pp. 4-5)

- ・ところが、歴史学と人類学の理想的な収束には障害がある。使用されるドキュメント群 が異なるからである。
- ・人類学者によってフィールドワークを通して再建される社会関係の複雑さは、歴史家にとっての文書史料の一面性と鋭く対照的である。歴史の史料は、研究者の専門分化に正当性を与えている。教会記録は個人の生と死を、財産目録は所有者やテナントである諸個人を、裁判記録は裁判における原告や証人としての諸個人を教えてくれる。
- →しかし、これでは個人を特定の社会に結びつけている関係性の複雑さを見落とす危険 がある。
- ・一方、予想外のデータに富んでいる裁判記録や異端審問記録のような史料、特に後者は歴史家にとって人類学者の研究にもっとも近い史料である。調査地域が十分に限定されているならば、一連の個人に関する史料は、さまざまに異なる社会的文脈のなかにいる同一の個人や集団を見つけ出すことによって、時間と空間を超えることができる。文書館の迷宮の中で研究者を導くアリアドネの糸は、名前なのである。

〇名前に注目する研究方法 (pp. 5-7)

- ・名前付きの人口統計学(nominative demography) によって、歴史人口学に視点の変化と新たな調査対象がもたらされた。→家族復元法
- ・しかし、名前による方法(nominative methodology)は人口学の史料に限定されるわけではない。
- ・名前に注目する具体的な研究方法①
- ・小作地域における教会記録には(e.g.ボローニャ周辺の地域)、管理者(manager, reggitore) とその家族の成員の姓名のとなりに、母屋の名前や耕作地の名前まで書かれている(e.g. Red House, White House, Palace など)。こうした場所の名前を手掛かりに土地の登記簿を見ることで、重要な情報の欠片である農地の大きさを知ることができる。土地の名前と土地の大きさのとなりには、地主の名前が書かれている。この地主の名前から、その土地に関する私文書にさかのぼることができる。幸運な場合にはこの私文書から、行政記録における土地の年間収支、小作人と彼が耕作する土地の名前、穀物の種類ごとの年間

穀物生産高、総生産高、所有地と小作人家族に対する負債の合計がわかる。

- ・こうした調査の旅は、教区の記録ではなく大きな土地の記録からはじめるのがよい。そこには他の文書史料(教区簿冊や土地登記簿)のなかで探すことのできる農民の名前や土地の名前が含まれているからである。基本的には、すべての家族とすべての所有地の名前が書かれている。公証人記録にも同様の手続きを適用することで、家族間の婚姻戦略を再構成することが可能となる。
- →こうした調査方法は、諸個人がそこに挿入される社会関係のネットワークの生き生き としたイメージを与えてくれる。
- ・名前に注目する具体的な研究方法②
- ・地理的移動距離の大きな個人の場合でも、この種の研究は可能である。たとえば、コンスタンティーノ・サッカルディーノ(Constantino Saccardino)に関する調査がある。
- ・蒸留酒製造人にして職業道化師であった彼は、ボローニャ異端審問によって異端として 裁かれ、1622年に三人の仲間とともに死刑判決を受けた。裁判記録は消失しているが、 市民の年代記や印刷物によって、事件や人物の詳細が伝えられている。それによると、 サッカルディーノはヴェネチアに住んでいたことがわかる。そこで、ヴェネチア異端審 問の文書記録を調査すると、彼とともに告発されたグループが明らかになる。また、簡 潔な記述から、サッカルディーノがフィレンツェでメディチ家に道化として仕えてい たことが明らかになる。実際、メディチの宮廷による支払いの受領者のなかに彼の名前 が見出されるのである。さらに、書誌学的調査からは、彼が医術についての小さな論文 を出版していたことが明らかになり、彼が治療した患者のリストがそこに含まれてい ることがわかった。このリストは、ボローニャの公証人たちによって作成された記録に 類似しており、ボローニャ国立文書館に保存されている公証人記録を調査することで 確認できる。
- →このように、断片的にではあるが、バイオグラフィーはその人に接している関係性のネットワークの中から少しずつ明らかになっていく。

○プロソポグラフィー研究 (pp. 7-8)

- ・上記の二つの研究は、あらゆる違いにもかかわらず、次の二つの共通点を持っている。
- ①名前の使用
- ②下層社会への参照
- ・また、ローレンス・ストーンによれば、プロソポグラフィー研究は次の二つの潮流に区

別される4。

- ①エリートを対象とする質的研究
- ②より広い社会集団を対象とする量的研究
- →①の分析手法と②の観点を組み合わせた下からのプロソポグラフィーが必要である。 下からのプロソポグラフィーは一連のケーススタディを対象とする。しかし、質的で 徹底した調査の対象にすることができるのは、数的に限定された存在、つまりエリー トだけである。そこで、問題となるのは利用可能な大量のデータのなかから関連性の ある重要なケースを選び出すことである。
- ・重要なケースとは?
- ・必ずしも統計的に頻出するものではない。エドアルド・グレンディが「正規なる例外」 (normal exception)と呼んだものが存在する⁵。この表現には少なくとも次の二つの意味を 当てることができる。
 - ①表面的にだけ例外的であるような記録
 - ②下層階級の社会的現実について沈黙していたり、あるいはそれを体系的に歪めているような記録(統計的に頻出しない、こちらが真に例外的な記録)
 - →②の記録は、いくらでも存在するステレオタイプな記録よりもはるかに多くのこと を明らかにしてくれる。限界事例こそが、ふつうの記録に現れない隠された現実を明 らかにする痕跡とカギなのである。

○まとめ: ミクロストリアとはどういうものか (pp. 8-9)

- ・ミクロストリア分析には次の二つの側面がある。
 - ①規模を縮小することで、ほかのタイプの歴史学では考えられない「現実の生活」を再 現すること。
 - ②生きられた経験がその内部でつながれていく目に見えない構造を調査すること。
- ・フェルディナン・ド・ソシュールのラングとパロールの関係がモデルとなる。社会関係 を統御する諸構造はラングのように非意識的である。形式と内容とのあいだにこそ学 問が埋めなくてはならないギャップがある。
- ・ミクロストリアと歴史一般は、「現実生活の学問」(science of real life, scienza del vissuto) と定義される。ミクロストリアはマクロの歴史学のルールを修正するということに自 己限定されない。ミクロストリアの研究者が最初に発見するものの一つは、マクロの歴

⁴ Lawrence Stone, "Prosopography", *Daedalus*, 100, 1971, pp. 46-79

⁵ Edoardo Grendi, "Microanalisi e storia sociale", *Quaderni storici*, 35, 1977, pp. 506-520.

先端課題研究 19 文献レビュー(歴史学) 一橋大学大学院言語社会研究科博士後期課程 鈴木 良和

史学の規模でおこなわれる分析にはめったに表れない、あるいは存在しない関係を発 見することである。